最上義光没後四百年
記念号

歴史館だより

題字　最上家第47代当主　最上公義氏

- 最上義光再考 ― 誉田慶恩『奥羽の驍将　最上義光』の見直しを通じて
- 連歌の概要 ― 義光の一座した作品に触れながら
- 最上義光歴史館サポーター「義光会だより」No. 3
- 研究余滴　「最上紅花の行方」

No.20
2013年3月発行
最上義光歴史館

最上義光再考
誉田慶恩『奥羽の驍将　最上義光』の見直しを通じて

松尾剛次

誉田慶恩『奥羽の驍将　最上義光』（人物往来社）は、五十年近く前の一九六七年に刊行されたものであるが、現在も最上義光（一五四六－一六一四）研究の際の必読書といえる。誉田氏は多数の最上義光関係史料の博捜のもとに、等身大の最上義光像に肉薄している。本書の特徴は、最上義光を英雄としてではなく、実像を実証的に明らかにしようとしているだけに、大いに示唆に富んでいる。本書を読めば、現在においても最上義光研究のおおよそを知ることができる。

しかし、その後の武田喜八郎氏、片桐繁雄氏らの研究や、『横手市史』ほかの研究によって、ようやく誉田氏の提示された最上義光像にも疑義が提起されている。

私自身もここ十年ほど最上義光研究に従事し、できる限り史料の博捜に努め、二五〇点ほどの最上義光書状などを収集できた。そうした史料などを使って見ると、誉田氏の玉著にもいくつかの問題があることがわかってきた。とりわけ、美術作品や文学作品が史料として使用されていない点なども大きな問題といえよう。そこで、『奥羽の驍将　最上義光』の問題点に注目しよう。

まず第一に、最上義光の幼年時代に関して、八日町の最上氏ゆかりの寺院宝光院旧蔵（現、山形大学図書館所蔵）の文殊菩薩騎獅像が全く利用されていない点がある。本像は刺繍仏であるが、それには、制作年・制作者名が刺繍されていてわかる。すなわち、この文殊像は、中野（山形市北西部）寿昌寺に住む源氏末葉の永浦尼が刺繍して、永禄六（一五六三）年四月十七日に法（宝）光院住職増円に寄付したという文言が刺繍されている。宝光院は、最上家の改易（一六二二年）後は、最上氏の氏寺ではなく常陸国千妙寺、上野寛永寺の末寺として生き延びたために、最上時代の史料、とくに中野時代はまったく不明であった。本文殊像により、宝光院の住職は、永禄六年当時、増円であったことがわかる。

絹本刺繍文殊菩薩像

ところで、刺繍者である永浦尼が住む寿昌寺は最上義守の菩提寺であったと考えられ、そこに住む尼は、最上義守の嫡妻か母と推測される。母だとすると、当時、六十歳を超えていたと推測され、当時は、平均寿命は短く、義守の母が生きていた証拠がないことから、ひとまず、永浦尼は妻だと考えたい。もっとも、尼だといっても、当時は在家の尼として、普通の生活を送っていた。

義守の正妻は、系図によって相違があるが、そのうち、最上氏と密接な関係にあった寺院の一つである「宝幢寺系図」によれば、小野少将の娘とされる。それゆえ、永浦尼とは、小野少将の娘であったと推測される。

ところで、注目すべきことに、永禄六年六月十四日には最上義守・義光父子が京都にのぼり、将軍義輝に拝謁している。この拝謁は、義光が元服し、その際、将軍の義輝（第十三代将軍、一五三六～六五）の一字をいただいた事に対するお礼と考えられる。すなわち、臣従の礼を行ったのであろう。

そこで、本刺繍の制作が、同年四月十七日であり、京都へのぼる二箇月ほど以前であることなどから、義守妻（義光の母）が、夫と息子の上洛の旅の安全と武運長久を祈って刺繍したものと考えられる（拙稿「山形市宝光院と文殊菩薩騎獅像」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要　第六号』、二〇〇九）。

次に問題となるのは中野義時である。誉田氏は天正二（一五七四）年の最上氏の内乱を通じて、最上義光の弟で、中野の城主となった中野義時と最上義光との対立に光りを当てている。誉田氏は、最上義守が義光の弟義時を寵愛して跡を継がせようとし、元亀二（一五七一）年に義光に家督を譲ったにもかかわらず、天正二（一五七四）年には娘婿の伊達輝宗の援助のもとに義光と戦った。これを最上の乱という。

この中野義時の存在に関しては、片桐氏ほかの実在を否定する見解が出、大いに注目されている。というのも、大澤慶尋『青葉城資料展示館研究報告「天正二年最上の乱」の基礎的研究』（二〇〇一）によって、天正二（一五七四）年に起こった最上の乱の実態が明らかになり、天正最上の乱関係史料に出て来る中野殿とは最上義守であることが確実となった。すなわち、最上の乱とは義守と義光との対立であった

のである。それゆえ、天正二年の最上の乱を最上義光と中野義時との抗争とみる説は成り立たないといえよう。とすれば、中野義時は実在しなかったのかというと、少し疑問が残る。

義守・中野義時と義光との対立・抗争説は、古くは『乱補出羽風土記』（一七九二年刊）あたりから見られる。それは、両所宮の里見光當氏らが作成を企画したが死去したために、結局、弟子平田一元が遺志をついで刊行した。その「中野城」の項目には

義守嫡義光に山形を領せしめ、二男義時を中野の領主とせり、然るに兄弟不和にして、兄義光を亡さんと企、中野村山王別当宝光院、山形吉事宮の神職大宮司と両家にて、調伏の祈祷有けるに、其催し既に顕れ、義光大に立腹有て、義時は切腹被仰付亡ひたり＊天正三年の頃とそ、その子備中仙台へ逃行

＊山王別当宝光院は追放、大宮司は改易に成、吉事宮別当には成就院に被仰付、家中より宮の内え引越、（中略）、其後義光、薬師寺別当国分寺え御入之時、国分寺法印種々御詫言申上ければ、御厚免有て、山王社並宝光院共に山形に引地に被仰付、今の鉄砲町の宝光院是也、＊此時里見氏先祖、両所宮え押へのために、被付置しか、最上家改易の後威勢衰へ、いつとなく社家となれりとぞ、此事国分寺へ証文有＊

とあり、宝光院と山形両所宮の大宮司が中野義時に味方して義光を呪詛した。おこった義光は山王別当宝光院を追放し、大宮司は改易され、山形両所宮は成就院の支配下になり、城内から宮の内へ移した。その後、国分寺法印の取りなしで、山王社並宝光院共に山形に移ってきたという。

この話は、山王社並宝光院が中野から山形城下に移ってきた理由を示していて興味ぶかい。というのも、中野時代の宝光院の資料については、文殊騎獅像以外になく、別当についても、はっきりせず、なぜ山形へ移転したのかも不明だったからである。この話は、一方の当事者であった両所宮に伝わった伝承で、「此事国分寺へ証文」が当時においては残っていたと考えられ、大いに示唆にとんでいる。

ところで、義時は、最上系図の菊地本にのみ見えるとされるが、注目すべきは、光明寺本（一七四六年編纂）最上系図には、最上義光の弟に「中野殿」と見えることである。

光明寺は、最上ゆかりの寺院であり、義光兄弟の一人に「中野殿」という、中野を拠点とした人物がいた可能性は残る。

とすれば、一つの可能性として、最上の乱に際しては、元服前の子供であったために、父義守が主導者であり、前面にはでなかったにせよ、義守は「中野殿」と呼ばれる義光の弟を擁していた可能性はまだ残っているのではなかろうか。

近年の研究によって、明らかになったいま一つは、文化人としての最上義光像であろう。すでに国文学の方では、最上義光の連歌を詠む文人としての側面に大いに光りが当てられてきた。しかし、誉田氏はそうした側面には光が当てられていない。近年は、片桐氏らによって、文化人としての側面が大いに注目されている。最上義光は決して田舎侍ではなかったのである。

さらに、最上義光の「目指していたもの」、理想が明らかにされていない。最上義光が戦国の動乱を武力とたくみな外交戦略によって、しだいに最上川を下って庄内に勢力を拡大していった。それは、偶然ではなかった。

というのも、最上義光は、「羽州探題」たらんと夢見ていたからである。最上家は、斯波兼頼が羽州探題として入部したことに始まる。義光は、この羽州探題として山形・秋田を支配することが夢であった。その夢は、天正十六（一五八八）年に豊臣秀吉によって、羽州探題職に任命される（閏五月十一日付中山光直書状、『横手市史　史料編古代・中世』四三四頁）ことによって達成することになる。

ところで、私は、最上義光発給文書を二五〇点ほど収集してみた。最上義光文書は年欠文書が多く、義光の活動を年代順に追うことは困難であった。だが、『横手市史』などによって、伊達のみならず、小野寺らの戦国大名との関係を通じて年が確定されつつある。また、従来は、百点ほどの文書を使って最上義光の活動が論じられてきたこともあって、最上義光の生涯、とりわけ五十七万石を領有した江戸時代の叙述も十分とは言い難い。

たとえば、図のような七得の小印が押された横折り紙の印判状は数多く残っている。とりわけ、慶長十七（一六一二）年六月四日付けのもは百を超える寺社に出されたが、まさに慶長十七年こそは庄内支配も確立した最上時代の一大画期であったのだ。

この他にも論じたいことは多いが、紙幅がつきたのでこれで筆をおこう。

2011年2月2日　山形新聞

七得の小印が押された横折り紙の印判状

略歴

松尾剛次（Matsuo Kenji）

一九五四年　長崎県雲仙市愛野町に生まれる
一九七七年　東京大学文学部国史学科卒業
一九八一年　同　大学院人文科学研究科国史学専門課程博士課程退学
一九九四年　同　大学院人文科学研究科より博士（文学）の学位授与
二〇〇二年　ロンドン大学アジア・アフリカ研究所（SOAS）客員教授
二〇〇三年　東京大学C・O・E特任教授
現在、山形大学人文学部教授。鎌倉新仏教を中心とした日本宗教史・日本中世史を研究している。

【著者】
『「お坊さん」の日本史』NHK出版　二〇〇二年
『破戒と男色の仏教史』　平凡社　二〇〇八年
『知られざる親鸞』　平凡社新書　二〇一二年　など

連歌の概要

―義光の一座した作品に触れながら

名子 喜久雄

ある時代に隆盛を極めた文芸ジャンルが、時の流れにより、創造のエネルギーを失ってしまうことは、多い。平安時代の物語・中世の軍記は、その代表である。(創造のエネルギーを失いかけても、変質することにより今日まで、人々に何らかの形で継承されたものに能・歌舞伎がある。和歌・俳諧は「改良」されることにより、短歌・俳句となった)

連歌は、創造のエネルギーを失ったジャンルの一例であろう。その発生は、連歌を「筑波の道」と称することからわかることだが、倭建命の東国での御火焼の翁との問答

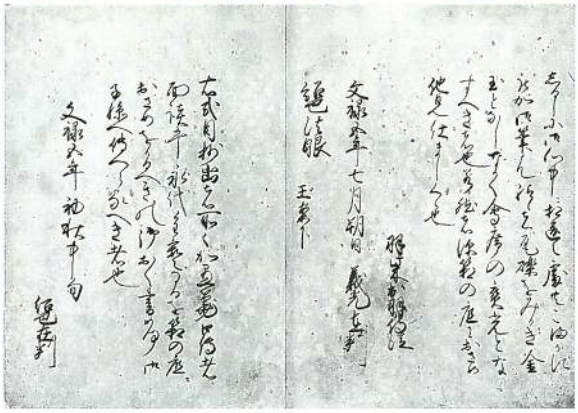
新治　筑波をすぎて　幾夜か寝つる
かがなべて　夜には九夜
日には十日を

とするのが通例である。(五七五・七七の歌体でない所から、「万葉集」巻八の家持と尼の唱和とする考えもある)

五七五(長句)と七七(短句)のいづれが先行しても良いが、前記のように一セットで終わるものを「短連歌」という。先に詠まれた句(「前句」)に、付けられた句が「付句」である。その付句に、次の付句を続けて、その連続が、一定の句数(三十六・五十・百)になったものを「長連歌(鎖連歌とも)」と称する。

前記の倭建命の例のように、連歌は和歌よりは、会話性・問答性が強かった。鎌倉期以後中世を通じて大流行するが、愛好者は無論のこと、連歌の名人が、宗祇・紹巴の如く身分卑しき者から輩出する。

ところで、長連歌を人々が詠む折に、安易な句作を嫌って、様々に制約を加えるようになった。その制約を、まとめたものが「式目」である。「式目」は、



「連歌新式」最上義光注　里村紹巴加筆

時代の中で一部手直しが行われた。それが「新式」である。これらを心得ていなければ、連歌の場(座)に居ることは難しい。

「式目」を人々に教授したりした、連歌の職業的名人が宗匠である。連歌の座を差配するだけでなく、源氏物語・古今集などの古典文学の解釈の伝承者でもあった。

さて、義光も一座した「慶長元年(一五九六)十二月二十五日　賦何船連歌」を素材として、いささかながら、連歌の作り方を略説したい。

発句(第一句目)は、

雪晴(れ)て行く水遠き末野哉　唱叱

詠作の季節(冬十二月)に応じて、眼前の景を詠みこむ。詠み人は、主客が普通。貴人の場合もある。

脇句(第二句目)は、

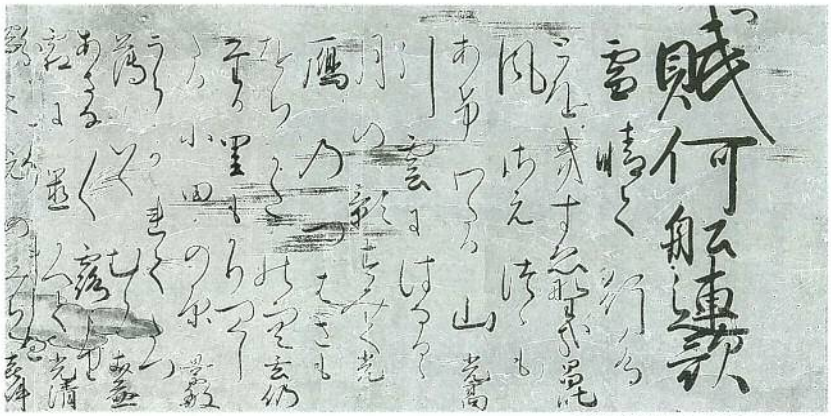
風さえつつも明(け)渡る山　光高

発句の世界を受け、季節を同じくして、かつ、発句に詠まれていないもの(「風」と、「末野」の反対方向にある「山」の明け方の時間)を詠む。普通は亭主が詠者。(光高が亭主かは存擬)

第三(第三句目)は、

引(く)雲にはなるゝ月の影澄(み)て　光

第三句目を、特に第三と称す。第四句から最後の句(「挙句」)の直前までを、一部を除き、「平句」という。第三は、発句・脇句の世界を転じ、作中世界を広げる。風に雲が動き残月が姿を見せる。空に視線が移った。貴人(ここでは義光・一字名「光」)が詠む。発句が貴人の時は主客。



「賦何船連歌」初折の表部分

このように連歌の世界は展開する。挙句で世の千秋万歳を寿ぎ、連歌は終わる。

※現在入手しやすい参考書

「連歌辞典」　廣木一人　平成二十二年　東京堂出版

「連歌とは何か」　綿抜豊昭　平成十八年　講談社

(後者は、義光についての言及もある)

(山形大学地域教育文化学部教授)

最上義光歴史館サポーター
義光会だより
No.3
2013年3月

題字　齋藤蕉石

最上義光歴史館ボランティア活動

一、「ヨシアキ☆すく～る」の取り組み

今年度は、十一校児童数六七〇人の四年生に講座を学習頂きました。

今までの御意見を踏まえ資料内容を改善し、義光の兜に弾が当たった箇所を拡大する動画等を取り入れて子供たちに興味をもってもらうように編集したり、長谷堂城や山寺、慈恩寺、羽黒山、庄内平野の場所が解るように地図を入れ、義光公と地域の結びつきがより解り易いように工夫しました。

また一方的な説明にならないように先生方との話し合いを密にし、学校側の要望を講座に反映させました。

説明の時間を長く頂いた学校では、陣羽織や袴にちょんまげ姿で登場したり、先生方にも義光に変装していただいたりしながら「ヨシアキ☆すく～る」を盛り上げて頂き大変好評を得ました。

来年度は義光没後四〇〇年にあたる年です。「ヨシアキ☆すく～る」にも四〇〇年イベントで活躍するキャラクター等を取り入れ、少しでも最上義光力向上に役立てる様に会員一同頑張りたいと思います。

二、お客様との交流

多くのお客様に来館して頂きました。その中でも、米沢の直江公の会員が入館された時は緊張しました。直江兼続公と言えば、長谷堂合戦で戦った敵方なのです。

その時は阿部会長も案内されお互いの戦ぶり闘いぶりなどの話が弾み、義光公木像の前で硬い握手をし、これからの最上・上杉の観光活動を誓いあっていました。その後、直江公の会員は長谷堂城、直江本陣、主水塚の見学予定として館を後にしました。

三、会員の資質向上について

本年度は現地研修、講習会を五回実施しました。その中から三点紹介します。

●成沢城の現地研修

会員であり、成沢城跡公園ガイドの河内さんの講師により現地研修をおこないました。成沢城主の話に始まり、整備された成沢城の堀切（のき下）、和合（大手門）、副郭など遺構の構造と特徴等を詳しく案内して下さいました。公園の周囲にある、八幡神社では堀田家との関わりや、成沢道中公木像等の案内を頂き、最後に国重文の石鳥居を見学しました。

●長谷堂合戦鳥瞰図の研修

鳥瞰図作者の松本さんから説明を受けました。鳥瞰図に添って上杉軍が最上領に侵略し、戦いが起こり撤退をした史実を解りやすく説明を受けました。

●最上地方の現地研修

十月九日最上地方の現地研修が行われました。

鳥越楯から新庄藩主戸沢家墓所では、戸沢家の歴史が覗え、最上家にもあればなといった声が聞かれました。

戦国時代、庄内、秋田と最上郡の領地を争う最上氏の本拠地となった清水城、最上氏に臣従し最上氏重臣として活躍した鮭延氏が居城した鮭延城では、現地のガイドさんが、案内して下さいました。

金山城跡や金山町の町並み、維持管理などについては役場の方が案内して下さいました。

最上義光公との関わりを現地で研修する事ができました。

清水御前のお墓（光明寺）

編集後記

今年度は、桜咲く頃、四〇〇年記念祭が開催され、一年間、多くのお客様が、入館されると思います。沢山のお客様との出会いを紹介する為に、交流内容を記載しました。

お客様に最上義光力を向上していただくチャンスの年です……悔いのない一年にしたいものです。

（佐藤）

○平成24年度 事業スナップ

○三十八間総覆輪筋兜の展示ケースの照明がLEDになってとても見やすくなりました!!

○企画展「市民の宝モノ2013」
第五回になってますます幅広い内容になりました。
出品者22名／出品件数30件

※最上義光歴史館の最新情報は
公式ホームページをご覧ください。
http://mogamiyoshiaki.jp

○サポーター養成講座「義光塾」
「う～む!!むずかしいぞ」
義光会のみなさん古文書の解読に挑戦中!!

○こども講座「ヨシアキ☆すく～る」
最上義光の忠臣長岡但馬守登場!!こども講座で大活躍!!
（山形市立第一小学校）

○「他のところもがんばって探してくださいネ!!」
歴史館も「街なか宝探し「芭蕉伝２」」の発見報告所として
ケーブルテレビ山形の広報番組に出演しました!!

○特別公開「坂紀伊守像」
毎年、最上義光の重臣坂光秀の命日にあわせて山形市清源寺より寄託いただいている肖像画を特別公開しています。このたびは坂家の末裔坂健一氏(写真中央)より光秀の子の重内光重の肖像画を出品いただき、その後当館に寄託いただくことになりました。

紙本着色　坂重内光重像
坂重内光重(1576－1663)は最上義光の重臣坂紀伊守光秀の二男とも養子とも言われています。最上家の分限帳から光秀没後に坂家を継ぎ紀伊守を称したことがわかります。

平成24年度事業

○企画展《4月1日から同月8日　前年度継続》
「市民の宝モノ2012」
～「卒業存績」と「最上義光公百万石行列絵巻」～

○常設展示Ⅰ《4月10日～7月8日》
「鐵[kurogane]の美2012」～武士と日本刀～

○特別公開《4月17日～5月20日》
「坂紀伊守像」
※二代坂重内光重像と北館大学助利長像も同時公開

○常設展示Ⅱ《7月17日～10月14日》
「武士[mononofu]の晴れ姿」

○常設展示Ⅲ《10月16日～1月14日》
「四季の彩り」

○企画展《1月16日～4月7日》
「市民の宝モノ2013」

○歴史講座
サポーター養成講座「義光塾」　会場　最上義光歴史館　研修室
・11月24日　「山寺立石寺と最上義光」　講師／野口一雄氏
・12月15日　「山形を語る会　第3回『京都における義光の動静』」　講師／片桐繁雄氏
・1月26日　「城下町山形の賑わい－三つの時期－」　講師／横山昭男氏
・2月16日　「最上義光と宗教」　講師／吉田　歓氏
・3月16日　「山形県立博物館資料の中の最上義光」　講師／熊谷水緒氏

○歴史講座
「郷土史講座／義光公の手紙を裏打ちしよう!!」《3月2日、9日、16日》
・会場　最上義光歴史館　研修室　・講師　土屋威夫氏

○こども講座
「ヨシアキ☆すく～る!?」－山形の殿様、義光公を知ろう！－
講師／最上義光歴史館サポータークラブ「義光会」
・9月26日　山形市立蔵王第二小学校　四年生
・10月10日　山形市立第四小学校　四年生
・10月12日　山形市立第七小学校　四年生
・10月17日　山形市立大曽根小学校　四年生
・10月26日　山形市立桜田小学校　四年生
・10月30日　山形市立第二小学校　四年生
・11月7日　山形市立第八小学校　四年生
・11月15日　山形市立第九小学校　四年生
・12月5日　山形市立第一小学校　四年生
・12月15日　山形市立南山形小学校　四年生
・1月29日　山形市立蔵王第一小学校　四年生

研究余滴⑬

最上紅花の行方

長谷勘三郎

古田織部が曽我又左衛門に宛てた一通の書状（慈光明院所蔵）によって、一六一〇年ごろには「紅花なら最上」という定評が上方では成立していたことが明らかだが、このころは、山形の大名最上家からのお土産としても紅花は京都の公家衆に喜ばれたものらしい。慶長十六年（一六一一）に、公的な用務を帯びて江戸に来た公家山科言緒の日記にこんな記事がある。

十月二十三日、晴

一　早朝寺へ参る。一　最上駿河守（家親）宅を訪問。一　新城（江戸城本城に対して新たに建造された西の丸か）にお伺いした。

寺とは、増上寺だろう。数日前に家康が江戸に来ており、城内ではさまざまな催しがあり、増上寺の和尚も登城している。

十月二十五日　晴

一　大久保相模守（忠隣）へ早朝伺った。一　最上駿河守が私の宿へ訪ねられ、紅花を五拾嚢贈って下さった。

こういう記事である。同行してきた公家仲間の船橋秀賢の所へも、最上家の使者が来て同じように「紅花五十嚢」を届けてくれた。（秀賢、慶長日件録）

出羽の大名最上家から天皇に仕える公家たちに対する大事なプレゼントである。みやげを「土産」と書くように、己が領地でとれる「いいもの」、他の土地の物よりすぐれたもの、そう自慢できる物品が出羽国では紅花だったわけである。

そこで疑問。もらった紅花を、彼らは何に使ったのか。

考えるヒントが、山科言緒の日記十月二十九日の条にあった。彼らの勤務先である朝廷のお歴々に配っていたのである。配分先は次の通り。

禁裏（宮中）へ十嚢、仙洞（上皇御所）へ十嚢、女御（天皇の側にお仕えする女性）へ十嚢、関白近衛信尹へ五嚢、近衛殿政所へ五嚢、以上で四十嚢。あとの十嚢についてははっきりしないが、江戸下りの長旅の土産物でございますという具合に、天皇・后、廷臣のトップたる近衛家に差し上げたのだった。

献上を受けた方々も、喜んだのだろう。

話し変わって、最上家の重臣、東根城主であった里見薩摩守が、連歌の添削指導を頼んだ相手、里村昌琢にお礼として送ったのも紅花であった。年不詳、七月二十七日付。

「おととし見てさしあげた一巻が確かに届いたとのこと、まずよかった。ところでこの度は二百韻（二百句、百韻連歌二巻）到来、確かに添削します。（お礼の）紅花二十斤届けてくれたようで忝い。玄仍が遠行（死去）したことお聞きになったでしょうか。吃驚なさったことと存じます。思いがけないこと、致し方ありませぬ。」

この手紙のとおり、ここでも紅花は最上からお礼の贈り物となっていたのである。昌琢がこれを何に使ったか。今、それは分からない。

朝廷の高貴な方々にしても、紅花をどのように使ったか。それも不明。残念だが、今後の研究にまつほかない。

最上時代に山形名産となった紅花、ついの行方はいずこなりや。

ついでだが、里村玄仍は最上家とは大変ちかしく付き合っていたが、慶長十二年四月に亡くなっている。

平成25年度事業

1．展示事業

(1)企画展

①「市民の宝モノ2014」展（継続企画）（1月―4月）

山形市民を対象に、所蔵する「宝モノ」を募集して展示し、広く一般に公開する市民参加型の展覧会です。

(2)常設展示

最上義光を中心とした最上家関係資料と山形城関係資料、山形に関わる文化財などを展示紹介しながらテーマを定めて一部コーナー展示を行います。

(3)特別公開

①最上家家臣の肖像画（4月20日―5月19日）

最上義光の重臣坂紀伊守光秀の肖像画を、命日（4月26日）にちなんで特別公開します。併せて、二代坂重内光重の肖像画と北館大学助利長像の肖像画も公開します。

②「最上義光と連歌」（7月27日―9月11日）

新収蔵品の『賦何船連歌』の初公開と『賦何墻連歌』、『賦春何連詞』等の最上義光連歌を一挙公開します。

2．普及啓発事業

(1)こども講座「ヨシアキ☆すく～る!?」

山形市内の小学校に出向き、最上義光を中心に郷土の歴史や文化を学ぶ機会をつくり、郷土史に対する関心と理解を深め、愛郷心を育てる一助とします。

(2)ボランティアに係わる事業

最上義光と最上家を啓蒙することについて歴史館とともに活動する市民が、ボランティアという形で歴史館のサポーターとなって、来館者にきめ細かなサービスの提供を図るとともに、歴史館を核としたコミュニティーを創出します。

①「義光塾」

歴史館サポーターのスキルアップを目的とした勉強会です。

②「現地研修会」

歴史館サポーターのスキルアップを目的とした現地研修会です。

3．受託事業（最上義光公没後四百年記念事業）※予定

(1)特別展「重要文化財　光明寺本『遊行上人絵』」

～最上義光没後四百年記念全巻公開～

（9月14日～11月10日）

山形市光明寺伝来の紙本著色「遊行上人絵」十巻は、最上義光が文禄三年（一五九四）に狩野宗秀に描かせ、最上家初代斯波兼頼の菩提寺光明寺に寄進した絵巻物語です。没後四百年を記念して十巻全巻を特別公開します。

※詳細については最上義光歴史館へお問い合わせください。

表紙の資料

「静かなる記憶」最上義光の墓域

撮影者　須貝勝美（最上義光歴史館サポータークラブ「義光会」）

撮影日　平成二十五年一月十八日

撮影地　光禅寺（山形市鉄砲町）

没後四百年の節目にあたり、記念すべき年となったことを感慨深く思います。尚、この写真を撮影するにあたっては、義光公の偉大なる歩みに思いを馳せ、又山形の歴史に刻む武人として残されたものと想いながら、冬の寒さの中で写したものです。（須貝）

最上義光は慶長十九年（一六二四）一月十八日未刻（現行歴二月二十六日午後二時）ころ）六十九歳で山形城にて没しました。葬儀は同年二月六日（現行歴三月十六日）に義光が菩提寺として建立していた慶長寺（後に光禅寺）で執り行われました。

写真の墓域は、明治二十七年（一八九四）の市南大火で焼失したものを、大正二年（一九一三）の三百年忌に寄附を募り、十月十八日の没後三百年記念祭のときに復興したものです。

ご利用について

開館時間　午前9時から午後4時30分

入館料　無料

休館日　月曜日（国民の祝日となる場合はその翌日）

12月29日から1月3日

交通　JR山形駅より徒歩約15分

大手町バス停留所より徒歩1分

来館案内図

平成25年3月発行

編集・発行　財団法人山形市文化振興事業団
最上義光歴史館
〒990-0046
山形市大手町1-53
☎023-625-7101
FAX 023-625-7102
http://moganiyoshiaki.jp

印刷　株式会社大風印刷